

ヘーゲルは数と物理量を区別していない 竹之下 芳也（北九州市立大学名誉教授）

(1) 量と質について、古代ギリシャ以来その中身が問われたことはないのではないかと。とりわけ、唯物的立場においても、これでよいのかという問が起こってこないのは問題ではないだろうか。ある個別的物質は、「質」と「量」で記述されるとされている。しかし、これは正しいのだろうか。問題はここから始めなければならないが、今回は、その前にヘーゲルの「量」の問題点を指摘しておきたい。

(2) ヘーゲルの有名な規定、『数の概念の規定は集合数と単位であって、数そのものは両者の一体性である』【小論理学】。更に続けて、『定量は展開されて完全に規定されると数になる。数はその根本要素として「一つ」を持ち、そして分離の契機の面では集合数を、連続性の契機の面では単位を、その質的契機として自身のうちに含む』と。

(3) 数に単位があるというのは誤りとしか言いようがないのではないかと。物理量なら単位を持つのは当然であるが、ここでは物理的単位ではなく、その後と言う「一つ」のことともとれよう。

(4) 物理量とは、ある特定の単位で計量された数量のことで、確かに『一つ』づつを数え上げたとも言えるものである。ヘーゲルはここを混同している。

(5) ヘーゲルは『量』は「質から揚棄されたもので、質とは無関係のもの」と言っているが、ヘーゲルが言うその純粋な量つまり数は物理量と同じとしか言いようがない。

(6) 現代数学の立場から見ると、数は抽象概念であり、ある集合の要素である。それは、その集合の一つの要素とある演算をしたとき、その結果のものがまたその集合の要素となるとき、その要素はその集合の要素とされる。そこには単位というものは定義できていない。まして、大小とか、大きさというようなものも定義されていない。勿論、連続という意味なども改めて定義し直さなければならない。従って、『一と多』の弁証法などというものも全く成り立ちがたい。有限というものも定義し直さなければならない。

(7) これらのことは、ヘーゲルの論理学の展開そのものに大きな疑念を抱かされるものである。